

教師・保護者・友人からの賞賛と 自尊感情，学校適応感との関連

渡邊 賢二（皇學館大学教育学部）

藤井 美成（三重県津市立高茶屋小学校）

〈要旨〉本研究は，小学4年生から中学3年生を対象に，学年による教師・保護者・友人からの賞賛の差異と，教師と保護者と友人からの賞賛の差異を検討した。また教師・保護者・友人からの賞賛が自尊感情を媒介して，学校適応感を予測することを検討した。その結果，保護者，教師，友人の順で，子どもは賞賛されていると感じていた。学年による差異は認められなかった。教師と保護者からの賞賛は自尊感情と学校適応感を，友人からの賞賛は学校適応感を予測していた。自尊感情は学校適応感を予測していた。これらより，子どもの自尊感情や学校適応感を向上させるには，教師・保護者・友人からの賞賛が重要であることが示された。

〈キーワード〉賞賛，教師，保護者，友人，自尊感情

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感との関連（渡邊・藤井）

【問題・目的】

近年、教育現場において、子どもの自尊感情が低下しているということが、様々な調査研究において明らかにされている。例えば、内閣府（2000, 2007）は、小学生と中学生の約2,000人を対象に、日常生活や意識、価値観などに関する調査を実施している。調査の中に「自分に自信がある」という項目があり、「あてはまらない」と回答した子どもは、小学生で2000年が39.2%、2007年が52.6%、中学生で2000年が56.9%、2007年が71.0%であった。小学生と中学生、2000年と2007年の間には差異が認められ、年齢とともに、また年度とともに自尊感情は低下していると指摘されている。また、東京都教職員研修センター（2009）は、小学1年生から高校3年生の12,470人を対象に調査を実施した結果、小学1年生から中学2年生までは、学年を追うごとに得点が下がり、中学3年生で若干得点は上がるが、高校生になると再び得点が下がることを報告している。これらより、児童期から青年期中期にかけて、自尊感情は低下していく傾向にあると考えられる。

教育現場では、自尊感情を向上させるために様々な方法が議論されている。また自尊感情を高めるための教育実践についての書籍も多く発刊されるようになった（近藤, 2013など）。また自尊感情に関する書籍も同様に発刊されている（中間, 2016など）。東京都教職員研修センター（2009）の研究では、自尊感情を向上させるための方法として、「～が上手ですね」や「～はよくわかりますね」など肯定的な指導を加えること、また「肯定的な評価を加える」、「できたことやその過程をほめる」など、「ほめる」という言動がとりあげられている。これらを考慮すると、自尊感情を向上させるには、ほめること、すなわち賞賛が重要であるといえるだろう。

これまでのほめること、賞賛に関する研究について述べる。小学生と中学生の日常生活において、身近な他者は、教師、保護者、友人であると考えられる。よって、これまでは、教師、保護者、友人からの賞賛に関する研究が実施されてきている。

まず、教師からの賞賛と子どもの適応感との関連について述べる。古市・柴田（2013）は、小学5年生と6年生を対象として、教師による賞賛が子どもの

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感との関連（渡邊・藤井）

自尊感情および学校適応に及ぼす影響を検討した。その結果、教師による賞賛は、子どもの自尊感情、学習意欲、学校生活享受感情に影響を及ぼすとともに、自尊感情を媒介して学習意欲および学校生活享受感情に影響を及ぼすことが明らかにされている。また、井上（2015）は大学生を対象に、小学生のときを回想させ、両親・教師からのほめられた・叱られた経験頻度と自尊感情との関連を検討した結果、自尊感情高群は自尊感情低群より、両親と教師からのほめられ経験頻度が高かったことを報告している。

次に、保護者からの賞賛と子どもの適応感との関連について述べる。Felson & Zielinski（1989）は、5年生から8年生の自尊感情と両親のサポートとの関連を検討した結果、ほめられる頻度と自尊感情の間には正の相関関係が認められたと述べている。蓑輪・向井（2003）は、小学5年生から6年生を対象として、叱り言葉・ほめ言葉の経験頻度と自尊感情などの関連を検討した。その結果、結果評価・努力評価・人格評価といった肯定的なほめ言葉を多く経験した方が過剰要求・他者比較・当然といった否定的なほめ言葉より自尊感情が高くなることを指摘している。

最後に、友人からの賞賛と子どもの適応感との関連について述べる。前川（2018）は、小学5年生から中学3年生を対象として、友人からの賞賛が子どもの自尊感情および主張性に及ぼす影響を検討した。その結果、友人からの賞賛は自尊感情および主張性に影響を及ぼすとともに、自尊感情を媒介して主張性に影響を及ぼすことを明らかにしている。

これらより、教師、保護者、友人からの賞賛は自尊感情や子どもの適応感に影響があるといえるだろう。しかし、子どもの身近な他者である教師、保護者、友人からの賞賛の差異を子どもはどの程度認知しているのかという研究はほとんど見当たらない。そこで、教師と保護者と友人からの賞賛の差異を検討する。また、これまでの賞賛に関する研究の多くは、小学生を対象としているため、本研究は自尊感情が低下し始めると言われている小学高学年から中学生を対象とし、学年による教師と保護者と友人からの賞賛の差異についても検討する。さらに、先述した古市・柴田（2013）や前川（2018）が述べているモデルを参考にして、教師・保護者・友人からの賞賛が自尊感情を媒介して、学校

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感との関連（渡邊・藤井）
適応感を予測するというモデルを検討する（Figure1）。

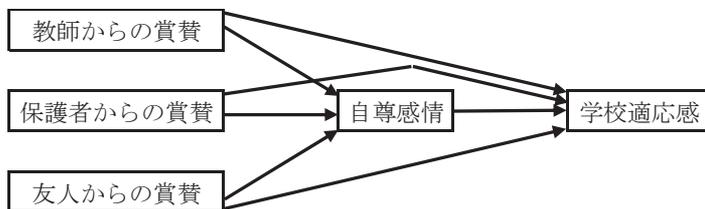


Figure1 教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感のモデル

【方法】

1. 調査対象者と調査時期

三重県内の公立小学校5校の小学4年生から6年生，公立中学校1校の1年生から3年生の869人を対象とした。869人に質問紙調査を実施し，欠損値などがある質問紙調査を除き，804人の質問紙調査を分析対象とした。内訳は，小学4年生81人，小学5年生168人，小学6年生191人，中学1年生105人，中学2年生133人，中学3年生126人であった。

調査時期は2018年6月上旬から9月上旬であった。

2. 手続きと倫理的配慮

各学校を訪問し，質問紙調査の趣旨と回答方法，倫理的なことについて説明した。

担任教諭が学級にて児童・生徒に質問紙を配布，回答，回収した。児童・生徒の調査表には，フェイスシートにプライバシー保護，回答の自由，学校の成績には関係がないことについて明記し，参加に同意する場合のみ質問に回答することを記述した。

3. 調査内容

- (1) 基本的属性：学校，学年，性別を尋ねた。
- (2) 教師からの賞賛尺度：前川（2018）が作成した友人からの賞賛尺度と古

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感との関連（渡邊・藤井）

市・柴田（2013）が作成したほめられ経験尺度を参考にし、筆者と第二著者、教育心理学ゼミに所属している学生と話し合い、内容が類似している項目を省き、教師・保護者・友人のそれぞれの立場に当てはまる18項目を作成した。項目内容を「先生から～」と示した。「1. まったくほめられなかった」～「5. よくほめられた」の5段階評価（1点～5点）で回答を求めた。得点が高いほど、ほめられた経験があることを示す。

- (3) 保護者からの賞賛尺度：教師からの賞賛尺度と同様の方法で18項目を作成した。項目内容を「親から～」と示した。「1. まったくほめられなかった」～「5. よくほめられた」の5段階評価（1点～5点）で回答を求めた。得点が高いほど、ほめられた経験があることを示す。
- (4) 友人からの賞賛尺度：教師からの賞賛尺度と同様の方法で18項目を作成した。項目内容を「友人から～」と示した。「1. まったくほめられなかった」～「5. よくほめられた」の5段階評価（1点～5点）で回答を求めた。得点が高いほど、ほめられた経験があることを示す。
- (5) 自尊感情尺度：Rosenberg（1965）が作成した自尊感情尺度の10項目を山本・松井・山成（1982）が邦訳したものをを用いた。「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の5段階評価（1点～5点）で回答を求めた。ただし、学校の話し合いで、「敗北者だと思ふことがある」、「自分は全くだめな人間だと思ふことがある」、「何かについて、役に立たない人間だと思ふ」の3項目を除き、7項目を採用した。
- (6) 学校適応感尺度：石田（2009）が作成した学校適応感尺度16項目を用いた。友人関係4項目、学習関係4項目、教師関係4項目、学校全体4項目から構成されている。「1. まったくあてはまらない」～「5. とてもあてはまる」の5段階評価（1点～5点）で回答を求めた。ただし、教員との話し合いにより、逆転項目である「この学校の友だちとの関係に不満がある」を「この学校の友だちとの関係に満足している」に、「この学校の授業はつまらないと思う」を「この学校の授業はおもしろいと思う」に、「この学校の先生に対して不満がある」を「この学校の先生に対して満足している」に変更した。

【結果】

1. 教師・保護者・友人からの賞賛尺度

前川（2018）は、友人からの賞賛尺度を因子分析した結果、「努力・親切」「勉強・技能」「性格・外見」の3因子構造であったと述べている。しかし、3因子間の相関係数は $r = .62 \sim .74$ で、高い値であった。水野・千島（2018）は3因子の因子間相関が $r = .54 \sim .68$ と高かったため、単次元構造の尺度として扱って研究を進めている。本研究においても、相関係数が高い値のため、単次元構造として分析を進める。

教師・保護者・友人からの賞賛尺度について、単次元構造を確認するために、主成分分析を実施した結果、すべての項目において十分な主成分負荷量が示された（Table1）。累積寄与率は、教師からの賞賛尺度が39.56%、保護者からの賞賛尺度が45.37%、友人からの賞賛が48.23%であった。

次に、教師と保護者と友人からの賞賛尺度の確認的因子分析を実施した。その結果、各尺度の適合度について、教師からの賞賛は、 $\chi^2 = 96.875$ (n.s.), $df = 92$, $GFI = .987$, $AGFI = .975$, $CFI = .999$, $RMSEA = .008$, 保護者からの賞賛は、 $\chi^2 = 133.102$ ($p < .001$), $df = 87$, $GFI = .983$, $AGFI = .966$, $CFI = .993$, $RMSEA = .026$, 友人からの賞賛は、 $\chi^2 = 89.287$ (n.s.), $df = 71$, $GFI = .988$, $AGFI = .971$, $CFI = .998$, $RMSEA = .018$ であった。適合度指標について、CFIは1.00に近いほど、RMSEAは.00に近いほどデータとモデルの適合度が望ましいと言われており（豊田, 1998）、高い値を示しているといえる。

教師・保護者・友人からの賞賛尺度の平均得点（SD）と信頼性係数（ α 係数）を求めた。教師からの賞賛得点は3.27（.61）、 $\alpha = .91$ 、保護者からの賞賛得点は3.45（.71）、 $\alpha = .93$ 、友人からの賞賛得点は3.19（.70）、 $\alpha = .94$ であった。内的整合性についても十分な値を示した。また教師からの賞賛、保護者からの賞賛、友人からの賞賛の各賞賛尺度の関連を検討するために、ピアソンの積率相関係数を求めた結果、すべて有意な正の相関関係（ $r = .66 \sim .74$, $p < .001$ ）を示した。

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感との関連（渡邊・藤井）

Table1 教師・保護者・友人からの賞賛尺度の主成分分析の結果

項目内容	教師		保護者		友人	
	負荷量	平均値	負荷量	平均値	負荷量	平均値
1. ○○から、最後まであきらめずに努力したことをほめられた	.60	3.55	.69	3.84	.70	3.17
2. ○○から、試合に勝ったことをほめられた	.57	3.19	.56	3.60	.64	3.30
3. ○○から、困っている友だちを助けたことをほめられた	.64	3.32	.76	3.39	.79	3.08
4. ○○から、クラスのためになることをしたことをほめられた	.68	3.54	.73	3.24	.77	3.08
5. ○○から、できなかったことができるようになったことをほめられた	.64	3.59	.72	3.96	.75	3.24
6. ○○から、運動や勉強を教えてあげたことをほめられた	.72	3.25	.75	3.15	.71	3.28
7. ○○から、人のいやがる係や仕事をひきうけたことをほめられた	.68	3.31	.68	3.18	.73	3.08
8. ○○から、掃除ががんばったことをほめられた	.61	3.47	.64	3.42	.72	2.94
9. ○○から、運動ができることをほめられた	.60	3.23	.63	3.48	.62	3.31
10. ○○から、作品（図工の作品や自由研究など）が上手なことをほめられた	.59	3.34	.66	3.62	.64	3.36
11. ○○から、字や絵が上手なことをほめられた	.54	3.32	.60	3.63	.61	3.50
12. ○○から、歌や演奏が上手なことをほめられた	.59	3.28	.65	3.27	.64	3.13
13. ○○から、テストでいい点をとったことをほめられた	.61	3.30	.63	3.97	.69	3.36
14. ○○から、むずかしい問題が解けたことをほめられた	.70	3.20	.69	3.49	.75	3.15
15. ○○から、本をたくさん読むことをほめられた	.58	2.90	.58	3.10	.60	2.82
16. ○○から、髪形や服装をほめられた	.52	2.64	.67	3.12	.65	3.09
17. ○○から、やさしいね・おもしろいねをほめられた	.65	3.25	.67	3.31	.66	3.52
18. ○○から、新しいことなどにチャレンジしてほめられた	.75	3.12	.74	3.38	.77	2.95
	寄与率 39.56		45.37		48.23	

2. 各尺度の平均得点（SD）と信頼性係数（ α 係数）

自尊感情の平均得点（SD）と信頼性係数（ α 係数）は3.03（.66）、 $\alpha = .66$ 、学校適応感の下位尺度である友人関係は4.04（.88）、 $\alpha = .88$ 、学習関係は3.43（.99）、 $\alpha = .90$ 、教師関係は3.48（.99）、 $\alpha = .90$ 、学校全体は3.43（.94）、 $\alpha = .84$ であった

3. 学年と教師・保護者・友人からの賞賛による2要因分散分析

教師と保護者と友人からの賞賛頻度の差異と学年による教師・保護者・友人からの賞賛頻度の差異を検討するために、2要因分散分析を実施した（Table2）。その結果、交互作用が有意であった。単純主効果検定（Bonferroni法）を行ったところ、友人からの賞賛については、小学4年と小学5年より中学3年の方が有意に高い得点を示した。小学4年、小学5年については、友人からの賞賛頻度より保護者からの賞賛頻度の方が、教師からの賞賛頻度より保護者からの賞賛頻度の方が有意に高い得点を示した。小学6年、中学1年、中学2年については、友人と教師からの賞賛頻度より保護者からの賞賛頻度の方が有意に高い得点を示した。中学3年については、友人からの賞賛頻度より保護者からの賞賛頻度の方が有意に高い得点を示した。

学年での比較では、有意差が認められなかった。教師からの賞賛頻度と保護者からの賞賛頻度と友人からの賞賛頻度との比較では、保護者からの賞賛頻

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情, 学校適応感との関連 (渡邊・藤井)

度, 教師からの賞賛頻度, 友人からの賞賛頻度の順に有意に高い得点を示した。

Table2 学年と教師・保護者・友人からの賞賛による2要因分散分析の結果

	小学4年	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	学年	賞賛	交互作用
①教師	3.15	3.20	3.30	3.26	3.27	3.38	1.91 n.s.	108.61 ***	3.87 ***
SD	.81	.61	.58	.58	.54	.55	$\eta_p^2=.004$	$\eta_p^2=.120$	$\eta_p^2=.024$
②保護者	3.52	3.38	3.49	3.49	3.38	3.48		③<①<②	友人: 小4, 小5<中3***
SD	.93	.69	.62	.68	.72	.71			小4, 小5: ③<①<②***
③友人	3.00	3.04	3.24	3.24	3.24	3.31			小6, 中1: ③①<②***
SD	.86	.69	.69	.69	.60	.68			中2: ③①<②* 中3: ③<②**

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

4. 教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情, 学校適応感との関連

教師・保護者・友人からの賞賛尺度において, 学年による差異が認められなかったため, 学年による分類はしないで, 調査対象者すべてによって分析を実施する。

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情, 学校適応感との関連を検討するために, ピアソンの積率相関係数を求めた (Table3)。その結果, すべてにおいて, 有意な正の相関関係が示された。

Table3 教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情, 学校適応感の相関関係

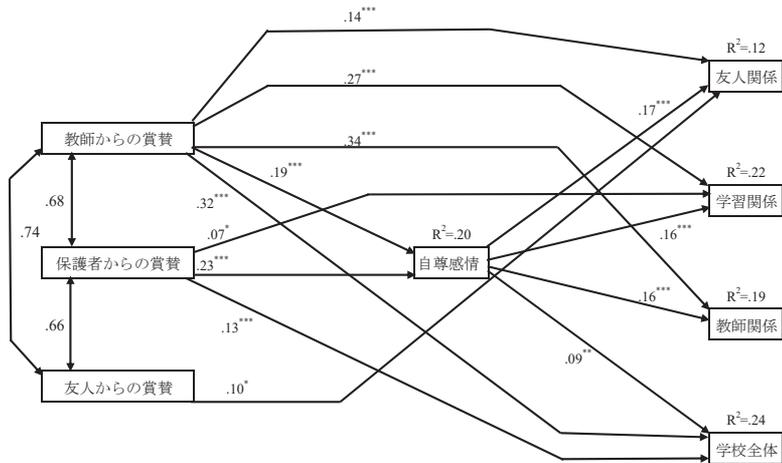
	自尊感情	友人関係	学習関係	教師関係	学校全体
教師からの賞賛	.40	.30	.43	.41	.46
保護者からの賞賛	.41	.26	.37	.31	.41
友人からの賞賛	.36	.28	.36	.30	.38
自尊感情	-	.27	.32	.29	.28

すべて $p<.001$

次に, Figure1に示した教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情, 学校適応感のモデルを検討するために, 共分散構造分析を実施した (Figure2)。その結果, モデルの適合度は, $\chi^2=.781$ (n.s.), $df=2$, $GFI=1.000$, $AGFI=.996$, $CFI=1.000$, $RMSEA=.000$ であった。適合度指標について, CFI は1.00に近いほど, $RMSEA$ は.00に近いほどデータとモデルの適合度が望ましいと言われており (豊田, 1998), 高い値を示しているといえる。自尊感情には教師からの賞賛 ($\beta=.19$, $p<.001$) と保護者からの賞賛 ($\beta=.23$, $p<.001$) からのパスが有意であった。学校適応感の友人関係には教師からの賞賛 ($\beta=.14$, $p<.01$), 友人からの賞賛 ($\beta=.10$, $p<.05$), 自尊感情 ($\beta=.17$, $p<.001$) からのパスが

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感との関連（渡邊・藤井）

有意であり、学習関係には教師からの賞賛（ $\beta = .27, p < .001$ ）、保護者からの賞賛（ $\beta = .07, p < .05$ ）、自尊感情（ $\beta = .16, p < .001$ ）からのパスが有意であり、教師関係には教師からの賞賛（ $\beta = .34, p < .001$ ）、自尊感情（ $\beta = .16, p < .001$ ）からのパスが有意であり、学校全体には教師からの賞賛（ $\beta = .32, p < .001$ ）、保護者からの賞賛（ $\beta = .13, p < .001$ ）、自尊感情（ $\beta = .09, p < .01$ ）からのパスが有意であった。



*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ 有意なパスのみ記述 誤差相関は省略

Figure2 教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感との関連

【考察】

1. 教師・保護者・友人からの賞賛尺度

教師、保護者、友人からの賞賛尺度について、前川（2018）と水野・千島（2018）の先行研究より単一次元構造であると考えられるため、主成分分析を実施した。その結果、すべての賞賛尺度の項目について、十分な主成分負荷量が得られた。各項目の平均値をみると、教師からの賞賛については、「教師から、できなかったことができるようになってほめられた」が3.59、「教師から、最後まであきらめずに努力したことをほめられた」が3.55、「教師から、クラスのためなることをしたことをほめられた」が3.54と高い平均値を示した。保護者からの賞賛については、「保護者から、テストでいい点をとったことをほ

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感との関連（渡邊・藤井）

められた」が3.97、「保護者から、できなかったことができるようになってほめられた」が3.96、「保護者から、最後まであきらめずに努力したことをほめられた」が3.84と高い平均値を示した。友人からの賞賛については、「友人から、やさしいね・おもしろいねをほめられた」が3.52、「友人から、字や絵が上手なことをほめられた」が3.50と高い平均値を示した。教師は、子ども自身やクラスをよくするための努力やその過程に対して、賞賛頻度が高く、保護者は、子ども自身の努力やその過程と結果に対して、賞賛頻度が高く、友人は、友人の行動を観察することができたり、自分自身に利益があることに対して、賞賛頻度が高いと考えられる。小学生と中学生は、教師、保護者、友人からの賞賛を高く認知している項目内容もあるが、それほど高く認知していない項目内容もあることが考えられる。また、教師と保護者と友人からの賞賛内容について、差異を感じていることが推察される。

教師と保護者と友人からの賞賛について、それぞれの関連を検討した結果、高い相関関係が認められた。教師からの賞賛頻度が高い子どもは、保護者や友人からの賞賛頻度も高いことが示された。賞賛頻度の高い子どもは、どのような場面でも、項目内容のような行動をしている可能性が高いと考えられる。

2. 学年と教師・保護者・友人からの賞賛による2要因分散分析

教師からの賞賛と保護者からの賞賛と友人からの賞賛頻度の差異と、学年による教師・保護者・友人からの賞賛頻度の差異を検討するために、2要因分散分析を実施した。その結果、教師と保護者と友人からの賞賛頻度の差異は、保護者、教師、友人の順に高い平均値を示した。しかし、学年による差異は認められなかった。子どもの最も身近にいる保護者に賞賛されていると感じていることが明らかになった。小学生と中学生ともに、保護者とは勉強や友人のことなど、毎日コミュニケーションをとっており（木村, 2011）、そのようなコミュニケーションをとっている場面において、賞賛されるようなことも多々あると考えられるため、最も高い値を示したのではないかと考えられる。また、交互作用の結果、どの学年も保護者からの賞賛が最も高い平均値を示していた。小学高学年から中学生になるにあたって、子どもの親に対する態度も変化

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情，学校適応感との関連（渡邊・藤井）

し，親も子どもに対する態度を変化させるように（渡邊，2013），親とのコミュニケーション量が減少していくと言われている（Steinberg & Silk,2002）。しかし，日常生活の中で，親は子どもの行動を観察し，子どもの努力している行動やその結果に対して，親は子どもを賞賛していることが推察される。

次に，友人からの賞賛について，小学4年生と5年生より中学3年生の方が，友人から賞賛されていると感じている。中学3年生になると，考え方や価値観のあう人と一緒にいる時間が長くなり，関係が深くなっていく（岡田，2018）。その中で，勉強やスポーツなどの結果やその努力を認め合い，賞賛していることが推察される。

3. 教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情，学校適応感との関連

Figure1の教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情，学校適応感の媒介変数モデルを検討するために，共分散構造分析を実施した。その結果，教師からの賞賛は自尊感情，友人関係，学習関係，教師関係，学校全体のすべてを予測していた。保護者からの賞賛は自尊感情，学習関係，学校全体を予測していた。友人からの賞賛は友人関係を予測していた。自尊感情は，友人関係，学習関係，教師関係，学校全体の学校適応感のすべてを予測していた。古市・柴田（2013）は，教師の賞賛が自尊感情と学習意欲・学校生活享受感情に影響を及ぼし，また自尊感情を媒介して，学校適応に影響を及ぼしていたと述べており，類似した結果であると考えられる。教師からの賞賛は，子ども自身の満足度を向上させることや，学校生活を楽しく過ごすこと，勉強を意欲的に取り組むこと，良好な友人関係を構築することにおいては，重要な行動といえよう。井上（2015）は親から褒められた頻度と自尊感情には正の相関関係が認められたと述べている。本研究では，保護者からの賞賛が自尊感情を予測しており，類似した結果と思われる。保護者からの賞賛が学習関係や学校全体も予測しており，親からの賞賛頻度は，勉強を意欲的に取り組むこと，学校を楽しく過ごすことにおいては，重要な行動と考えられる。友人からの賞賛は，友人関係を予測していた。前川（2018）は，友人からの賞賛が自尊感情や主張性に影響を及ぼしていたと述べており，本研究の結果とは相違が認められた。本研究で

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感との関連（渡邊・藤井）

は、相関分析においては、正の有意な相関関係が認められたが、共分散構造分析では有意ではなかった。今後は、詳細な分析が必要であろう。自尊感情は友人関係、学習関係、教師関係、学校全体を予測していた。古市・柴田（2013）は、自尊感情が学校適応感に影響を及ぼすと述べており、類似した結果と思われる。

本研究より、教師からの賞賛が子ども自身、また友人関係、学習、教師との関係、学校全体に影響を及ぼしており、教師行動が重要であることが示唆された。また、保護者からの賞賛も、子ども自身、学習に影響を及ぼしており、保護者の養育態度も重要であることが示唆された。

【まとめと今後の課題】

学年による教師・保護者・友人からの賞賛の差異と、教師・保護者・友人からの賞賛の差異、また教師・保護者・友人からの賞賛が自尊感情を媒介して、学校適応感を予測することを検討した。その結果、保護者、教師、友人の順で、子どもは賞賛されていると感じていた。学年による差異は認められなかった。教師と保護者からの賞賛は自尊感情と学校適応感を、友人からの賞賛は学校適応感を予測していた。これらより、子どもの自尊感情や学校適応感を向上させるには、教師・保護者・友人からの賞賛が重要であることが示された。また、教師と保護者と友人からの賞賛と子どもの学年による差異、また教師・保護者・友人の3者からの賞賛の予測を検討できたことは、新しい知見を提供できたのではないかと思われる。

古市・柴田（2013）や青木（2009）は賞賛の方法によって、子どもに生じる感情が異なると述べており、賞賛の方法によって、自尊感情や適応感に及ぼす影響も相違があると考えられるため、今後検討する必要があるだろう。

【引用文献】

Felson, R. B., & Zielinski, M. A. (1989). Children's self-esteem and parental support. *Journal of Marriage and the Family*, 51, 727-735.

古市裕一・柴田雄介（2013）. 教師の賞賛が小学生の自尊感情と学校適応に及

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感との関連（渡邊・藤井）

ほす影響 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 154, 25-31.

井上清子 (2015). 両親・教師からの褒められ叱られ経験と自尊感情の関連について 生活科学研究, 37, 97-105.

石田靖彦 (2009). 学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討—生徒評定と教師評定を用いた他特性—他方法相関行列からの検討— 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 12, 287-292.

木村敬子 (2011). 子どものしつけ・教育観 第4回子育て生活基本調査（小中版）(pp. 47-65) ベネッセ教育総合研究所

近藤卓 (2013). 子どもの自尊感情をどう育てるか ほんの森出版.

前川ほの花 (2018). 友人からの賞賛が子どもの主張性に及ぼす影響—自尊感情に着目して— 皇學館大学教育学部卒業論文（未公開）

蓑輪早織・向井隆代 (2003). 叱り言葉・ほめ言葉と親子関係認知, 子どもの心理的適応との関係 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 313.

水野雅之・千島雄太 (2018). 大学生活への期待と現実のギャップ経験が大学適応に及ぼす影響 カウンセリング研究, 51, 94-105.

内閣府 (2000). 低年齢少年の価値観等に関する調査

内閣府 (2007). 低年齢少年の生活と意識に関する調査

中間玲子 (2016). 自尊感情の心理学：理解を深める「取扱説明書」 金子書房.

岡田努 (2018). 青年期を通じた友人関係の変化 ノードとしての青年期 ナカニシヤ出版.

Steinberg, L., & Silk, J. S. (2002). Parenting adolescents. In M. H. Bornstein (Ed.), *Handbook of Parenting: Vol.1: Individual differences in parenting adolescents* (pp.116-119), Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

東京都教職員研修センター (2009). 自尊感情や自己肯定感に関する研究 東京都教職員研修センター紀要, 8, 3-26.

豊田秀樹 (1998). 共分散構造分析（入門編）：構造方程式モデリング 朝倉書店.

渡邊賢二 (2013). 思春期の母親の養育態度と子育て支援—母親の養育スキル

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情，学校適応感との関連（渡邊・藤井）

とは－ ナカニシヤ出版.

山本眞理子・松井豊・山成由紀子（1982）. 認知された自己の諸側面の構造
教育心理学研究, 30, 64-68.

付記

本論文は第2著者が皇學館大学教育学部に提出した卒業論文を加筆・修正したものです。本研究に協力してくださいました教育委員会，小学校教諭，中学校教諭，小学生，中学生のみなさまに深く感謝申し上げます。

教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情, 学校適応感との関連 (渡邊・藤井)

The relationship between praises from teachers and parents,
friends and self-esteem, school adjustment

Kenji Watanabe (Education Department, Kogakkan University)

Minari Fujii (Takajyaya Elementary School in Tsu city)

Abstract

The purpose of this study was to investigate the difference of praises from teachers and parents, friends in grades, and the difference of praises from teachers and parents, friends. And it was to investigate that the praises from teachers and parents, friends predicted self-esteem and school adjustment. As the results, elementary school students and junior high school students felt the highest praises from their parents. The praises from teachers and parents predicted self-esteem and school adjustment. The praises from friends predicted school adjustment. Self-esteem predicted school adjustment.

Keywords : praises, teachers, parents, friends, self-esteem